詩　とびばこ

昭和四十二年三月二八日（春の会）　岩手県沢内村立猿橋小学校での鈴木佑治先生のご教壇の再現授業を実施。光村四年上の巻頭の詩、今回は、三年生で実施する。

第一次指導・概観（一～四）　詩は、原則一時間扱い

（こんにちはといいながら入室し、子ども達の笑顔をほめ、授業の準備を指示する。鉛筆一本、詩が書いてある紙一枚を机の真ん中に置く。）　児童数（男五名、女二名、計七名）

○　改めて、挨拶をしましょう。私を見てください。（姿勢を正してから一歩前に出てお辞儀をしながら）こんにちは。

こんにちは。

○　いい声だね。今日は、特別に授業をさせてもらいます。校長先生と担任の鈴木先生が、いいですよといってくださったので、みなさんに会えて嬉しいです。二学期になって初めての授業なので、嬉しくてゆうべは、よく眠れませんでした。途中眠くなりそうですが、頑張りますのでよろしくお願いします。

○　この詩を読んでみましたか。（はい。と元気な返事）面白い詩だったでしょう。

○　何となく分かるでしょう。自分のことのような気がしない。こんな体験あるでしょう。（頷く子が多い）多分、三年生か四年生ぐらいの子が書いた詩だと思います。この詩を楽しんでいきたいと思います。

〈区画〉　なし

○　最初、この詩を読んできたいと思います。読む順番決まっていますか。（子ども達、担任の方を見る）決まってない。じゃあ、私が決めていいですか。（頷く）いい。じゃあ、二人の人に読んでもらいます。

○　（左奥の男の子）あなたが、最初。（その右隣の女の子）次、あなたにお願いします。時間があったら、見ないで読むのを暗唱といいますが、それをやってみたいと思います。その一番目、二番目、三番目、四番目、五番目です。（全員を割り振る）じゃあ、聞く人は、どういうふうに聞いたらいいですか。

集中して聞く。

○　そう、集中して聞くんだね。集中して聞くのには、どうしたらいいですか。（姿勢を直す子あり。）

○　そう、姿勢をよくする。紙を持って聞くとよい。

○　じゃあ、読む人。どう読んだらいい。みんな、どう読んでもらいたい。声は。

大きい。

○　大きい声で読む。速さは。

ゆっくり。

○　ゆっくり。大きい声でゆっくり読んでください。立って読んだ方が気合いが入るからね。お願いします。

一よむ　二名（一名ずつ二回）

（最初の子、少し速い読み。次の子は、落ち着いて読む）

○　はい、ありがとう。よかったよ。置いてください。聞く人も、二人が一生懸命読んでくれたので、中身がよく分かったでしょう。

二とく（読後感整理の話し合い）

〈題目〉（題名を手がかりに話の輪郭を確認、今回は題を板書しないで）

○　私が、絵を描くから何を描くか、考えてみてください。

（黒板の中央の上の方に跳び箱の略画）

○　さあ、これ、何に見える。（口々、言う）分かったら、手を挙げて。じゃあ、もう一度言うよ。あれ、何と見てくれましたか。はい。

跳び箱。

○　ありがとう。跳び箱に見てくれたのね。じゃあね、これがとびばこ

だったら、これ、何に見えるかな。（跳び箱の右に略画。描き終ると、元気に挙手）ああ、いいね。はい、あなた。

踏み切り板。

○　これ、踏み切り板だね。そうすると、これが跳び箱で、これが踏み切り板だったら、もう一つ描かなくてはならないね。何ですか。いい手があがるなあ。はい、どうぞ。

人間。

○　あっ、人間。人間も描かなきゃいけないな。道具で何かない。はい。

マット。

○　マット。（マットを描きながら）人間も描かなけりゃならないが、それも考えるよ。この詩を書いた人は、今、どっち。最初は、どっちにいたの。はい、あなた。

踏み切り板の方。

○　踏み切り板の方。そうすると、君たちの方から見て、右か左か。

右。

○　こちらの方にいる。（黒板を指し）ここにいる。最初、こちら側にいるのだが、ずうっとこちら側にいたかな。

踏み切り板をけったら、マット側の方にいる。

〈ひびき〉（詩からの響きを感じる）

○　右側の方から左側の方に行ったんだよな。じゃあ、こちら側にいた時と、こちら側に来たときとでは、違ったことがあるでしょう。何が違いますか。はい。

気持ち。

○　ああ、気持ちが違いました。そうだね。顔で言うと、（黒板を指しながら）こっちの顔とこっちの顔は、同じか違うか。さあ、どう違う。

右側が、普通の笑ってない顔で、左側が笑っている顔。

○　こちらの方は、もう笑った顔だな。こちら側の方は、笑った顔ではないんだな。（右を差し）こちら側の顔は、口を考えてみよう。どんな口をしていると思う。口は開いているか、閉じているか。

踏み切り板の右側の方は、歯を食いしばっている。左側の方は、やったって、口を開けている。

○　素晴らしいことを言ってくれたね。そう、こちらの方は口を結んで、うんという気持ちなんだね。こちら側の方に来たらにっこりしたんだな。まだ、違ったところがあるんじゃない。顔も違ったけれど、まだ違ったところがあるんじゃないの。（胸を指し）ここは、どうだ。

右の方は、不安や緊張した気持ちだけれど、左の方は、すっきりした気持ち。

○　ああ、そうすると、この動き方はどう。（右）こっちの時は。

どきどきしている。

○　不安だから、どきどきしている。（左）こっちの時は。

にこにこして、普通の動きをしている。

○　ああ、やっと落ち着いたいい気持ちになれたんだね。こちらにいた時は、不安でどきどきしていたのが、こっちに来たら、あったあと、いい気持ちになれたという話だね。

〈手引き〉

○　この詩を書いた人は、今までにこちら側に来たことがあったでしょうか。（口々にないという）じゃあ、こちら側に来たことがないと思う人は、手を挙げて。（ほとんど挙手）

○　そう、一度も来たことがない。こちら側に来てにっこりできた時には、とても嬉しかった。だから、この詩が生まれた。詩を書いて勉強したいと思います。とてもうてしい気持ちになって生まれた詩だということを考えながら全部写しください。

三よむ（手引きに従い黙読）

四かく（詩の形式で全文視写　教師は板書）

○　（原稿用紙を配りながら）配られたら、一番最後の行の下の方に自分の名前を書いてください。（書き終ったのを見て）書き終った人が、鉛筆を置いて、次に先生が、どんなことを言うかと、静かに待っている。素晴らしい三年生です。では、最初に、「とびばこ」と、題を書いてもらいます。二行目の上から四マス目、指をやってごらん。そこから「とびばこ」と書いてください。（書き終るの待って）

○　ようし、大きな字を書いているな。間違えたら、そのままにしておいていいです。先生の話をしっかり聞けて偉いね。

○　三行目書きません。四行目から書きます。一番上のマスからずっと写してください。下までいったら、行を変えるんだよ。この形に書いてあるように書いてください。書き方分かった。はい、四行目から、最高の字を書いてください。マス一杯の字で。

（一斉に書き出す。行替えができていない子もいたが、そのまま流すことにした。一人、丁寧に書いている子がいたので、その子が終わるまで待つ。終わった子には、暗唱を促す）

第二次指導・詩の心を読む（五～七）

五よむ　指黙読・指音読（板書を指揮によって読む）

○　さあ、それではね。みんな頑張って書いてくれたので、後で、展覧会をしてもらって下さい。友達の作品と比べて見てください。それでは、これを読みますので、この棒に合わせて読んでください。最初は、声に出しません。

（指黙読　一回）

○　今度は、声を出します。ここだけ、練習してみましょう。むねが、どきどきする。はい。

むねが、どきどきする。

○　よし、オッケイ。今のスピードでいいから、もう少し声を出して。胸が、はい。

（指音読　一回）

六とく（板書をもとに詩の心を話し合う）

〈語義・区分〉（難語句の解消と区分）

○　意味の難しい言葉ありますか。みんな大丈夫。じゃあ、ちょっと聞いてみるかな。（指しながら）不安って何。

……。

○　不安な気持ちというときには、自信があるの、ないの。

ない。

○　自信がないときに出るのね。そこでね。この詩を二つに切ってもらうんだけど。心を考えて、二つに分けてごらん。

とべるか、とべないか。

○　ここで切るの。惜しかったな。

とべなくとも、がんばるんだ。

○　これ、前に入るの後ろに入るの。

後ろ。

○　後ろになるのね。ここで切るのね。（板書　赤縦線）

○　そうすると、（前を指し）こっちの方は、どんな気持ちなの。

不安。

○　不安な気持ちでいるんだね。（不安　赤傍線）跳べる気持ちが強いのか、跳べない気持ちが強いのか。どちらが強いと思いますか。

跳べない気持ち。

○　跳べない気持ちが強いな。そうかな。はい、あなた。

一緒の気持ち。

○　一緒の気持ち。跳べるという気持ちと、跳べないという気持ちと、両方とも強いの。両方とも強いから不安になる。跳べるという気持ちが強かったら、跳べばいい。跳べないという気持ちが強かったらどうなる。

跳ばない。（という声あり）

○　とべない気持ちが強かったら、跳ばないまでだな。不安にはならないな。

○　この人、一度も跳んだことがないんだから、跳べた時の気持ちは、非常

にうれしいわけだな。その、跳べたもとは、何でしょうか。

跳べなくとも、頑張るんだと、決めたこと。

○　ああ、跳べなくとも、頑張るんだと、跳べなくてもでもいい。「とも」というと、ちょっと、大人っぽい感じがする。（赤傍線を引く）

○　跳べた理由が、まだ、もう一つある。何だろう。

思いきって跳んだ。

○　そう。思いきったから（赤傍線）。こちらにいるときには、できるかな、いや、跳んでみよう。そういう気持ちが強かった。そのことを忘れてしまって、跳んだからこういう気持ちになれて詩が生まれた。

○　じゃあ、この人は、次の時には、うまく跳べるだろうか、跳べないだろうか。

跳べると思う。

○　一度、思いきってやってみると、成功する。そうすると、次は大丈夫だと思います。読んで終わりましょう。

七　よむ（板書を読む　指音読）

（指音読一回）

○　じゃあ、消してみましょう。（漢字がある行は、漢字を残し、他の行は、少し残したり、句読点のみ残したりする）

（指音読（暗唱））

○　では、一人でやってみる人。出来たら拍手を。

（男の子　少し援助するが暗唱　拍手が起こる）

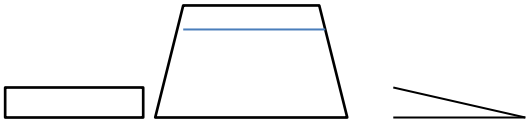
○　もう一人、どうですか。

（女の子　しっかり暗唱　拍手）

○　それでは、時間になりましたので、先生を見てください。（礼をしながら）お疲れ様でした。

ありがとうございました。

〈板書事項〉



むねが、どきどきする。
わたしの番だ。
「よし、とんでみせる。」
「とべないよ。」
二つのことばが、
心の中でぶつかる。
とべるか、とべないか。
不安な気持ちで走った。
「とべなくとも、がんばるんだ。」
そう思ったとき、
ふみきり板をけっていた。
バーン、
思いきってとんだ。
足が、マットについていた。
わたしは、とべたんだ。